補足
　23 年目に入る中高連携のティームティーチングの歴史ある取り組みについて、これまで那賀高校で勤めてこられた先生方の取り組みがどのように生きているのか、今後どのように生かしていくのかということを改めて考え、今回発表させていただきました。ご質問等よろしくお願いします。【発表者】

質疑
　発表ありがとうございました。中高の実践の中で、連携中学校での授業での気づきということが発表の中であったと思います。私も高校で授業をしていると、中学校でどこまで授業しているのか、どういう所で躓くのか、わかりにくさを感じるのかと思うことがあります。これまで中高の連携の中で、中学校の教科書と高校の教科書とでは違うので、那賀高校ではこういう風に教えていると躓きが減るという取り組みがありましたら、教えていただきたいと思います。【富岡西高　阿部真弓教諭】

　ありがとうございます。 私も今年度からであまり回数は行けておらず、しかも、3 年生の授業を担当しているため、1 年生の中学校から入学してすぐの生徒の様子については、大西先生の方から話していただきます。

　ありがとうございます。今年度は 1 年生の副担任をしております。一昨年、相生中学校で 2 年生の時に教えた生徒と昨年度、鷲敷中学校で 3 年生の時に教えた生徒たちを教科担任として教えています。そこで見ていると、20 数名というクラスの中でも学力差があり、中学校の時は授業を聞いて、わかっていた生徒たちが高校へ入学してきて、「中学校でこんなんしたよね。」と言ってもポカーンとして、「あれ、〇〇先生と授業したでしょ。」と言っても、「そんな気がする。」と言う返事が返ってきます。「もう一回学び直しをしよう。」ということで、中学校で使用したプリントや教科書を利用して、復習をすることはよくあります。
　古文で言えば、係り結びの法則においても、係助詞というと生徒はわからなくなるので、「中学校の時は係り結びといっていたよね。高校では係助詞だよ。漢字が増えているよ。」という言い方をして、文法の教科書・参考書などで集中的に教えたりしています。口語文法で五段活用が生徒たちには入っているので、どうしても四段活用というのは難しく、「だって、中学校では五段だったよ。」という発言に、「中学校と高校は違います。現代語と古語では違います。昔の人はそのような言葉を使っていて、その流れから現代の私たちが使っている言葉になったんだよ。」と丁寧に話をしています。
　幸い、中学生の時に教えた生徒たちが今年度は例年より多く、14 名入学しています。中学校の授業の中で落ち着きがなかったり、集中力が切れたりする生徒たちの様子がわかっていることが多いので、やり方を変えてやっています。副担任をしているクラスでは、生活面や保護者とのつながりもある生徒もいます。さまざまな面で生活全般、部活動での対人関係も含めて様子を伺っています。【発表者】

　ありがとうございました。中学校での教科書を使用するというのが、私の発想の中にはありませんでした。以前に中学校との連携で教えた生徒をつないでいくということがよくわかりました。【富岡西高　阿部真弓教諭】

　今回の発表は那賀高校の状況を他校の国語科教員が知るというかたちになっていましたが、中学校での学びと高校においての学びとの違いは継続性という部分があると思います。他の学校でそういう部分で工夫していることやこのようなやり方ありますよということがありましたら、国語科教員がこれだけ集まる機会はなかなかないので、質疑等がないようでしたら、報告というかたちにはなりますがお願いします【司会】

　川島高校も中高一貫校で、先ほどの笠井先生は中学校で勤務されておりました。毎学期、

中高の国語科が集まって、教科会を開いています。正直、この発表が当たることが 4 年程前からわかっていたので、3 年程前から計画していました。このポスターを書いた生徒たちは、笠井先生が中学校の時に指導してくださった生徒を私が預かりました。「どのようなことをやっていますか。『書くこと』ってどうしていますか。ICT でやりたいんですよね。」という話をして、中学校に対して要求をしてました。しかし、県立中学校の生徒たちが主で ICT の活用については中学校によってばらつきがあると感じました。やっている中学校はやっているし、やっていない中学校はやっていないです。「word までできるよ。ここまでできるよ。ここまでさせておくからね。」と中学校の先生がさせてくださっていたのを、私が 4 年生（高 1）で受け取って、高 2 のここまできましたが、中学校によって非常にばらつきがあると感じているのと、質問としては那賀高校ではどのくらい中学校の先生とミーティングをしているのか、やっておいて欲しいことがどのくらい要求ができるのか、実際に川島高校では発表が当たっているので 3 年間かけてやりとりをさせてもらってやってきたのですが、みなさんどのくらいされているのか聞かせて欲しいです。【川島高　山根浩明教諭】

那賀高校は実際に難しい場面も多く、発表の中でも申し上げたのですが、週 3 コマの中の 1 コマしか関われないということが大きくて、実際に中学校の授業に T2 で入らせていただくが、指導書も予算の関係でいただけなくて、コピーを取っていただいたり、教科書も足りていなかったりして、小さな学校で余分がない状況です。教授用の資料が足りてなくて、たまたま家族が持っていたので借りてきた、そんな状況ではあるので、本当に「ここのコーナーだけお任せします。」と振ってもらって授業に参加しています。

高校からの要求という点では、中学校は義務教育なので口語文法などもひととおりは必ずやってくださっています。時間はかけられないけれど、ひととおり説明はします。高校では生徒の実態に合わせてという部分もあるが、中学校はすべてひととおりやってくださっているようです。逆に、これ以上要求するのは難しい、時数的にも厳しいと感じています。「ここまで教えてくださっていたのですね。」と高校に入学してきてから、身についていない生徒が多く、びっくりするというのが実態です。ほかにも中高で連携されている学校がありましたら教えていただきたいと思います。【発表者】

今はもう中高というかたちではなくなっていて、中等教育学校で 6 年間というかたちです。国語に関しても、3 年生で先取りをしており、現代の国語・言語文化を 1 時間ずつしています。4 年生で現代の国語 1 時間、言語文化 1 時間、論理国語を 2 時間を先取りになっています。大変であるのは 3 年生で中学校 3 年の教科書、さらに現代の国語と言語文化をしています。古文・漢文で言えば、高校 1 年生の 1 学期程度までを中学校で終了してもらう。文法などで言えば、動詞・形容詞・形容動詞あたりまでやってもらっています。しかし、まだまだ定着はしておらず、比較的学習に取り組む能力は高いとは思うのですが、4 年生で動詞の活用を尋ねると、さっとできる生徒はなかなかいないのが現状です。4 年生になり助動詞を学習をする際に用言の活用が出てきますが、すっかり忘れているので、再度やるという状況になっています。新課程になり、一番困っているのは、現代の国語と言語文化を先に学習しておかないと論理国語ができないことです。3 年生の時に本来であれば現代の国語を終わらせて、言語文化と論理国語で 4 年生というかたちにしたかったのですが、どうしてもそれができずに平行して進んでいます。学期進行で先取りをしているというかたちです。負担をかけているのは中学校 3 年の先生だと思っています。

国語とは離れますが、中高で 6 年間になるとどうしても 3 年生 4 年生というあたり、高校受験がないわけですから学習面で中学校 3 年生で受験勉強をして高校に入学したという流れがないので、高校で言えば 2 年生の中だるみが 3 年生 4 年生になってくるというところがあります。そうならないように指導はしているがなかなかうまいことは進んでいってはないと思いながら、自分でも努力しながらやっています。【城ノ内中等教育　寺澤　優教諭】

実状を語っていただき、ありがとうございました。ほかの学校で取り組むことは難しいと思いますが､その中でも中学校から生徒が何を学んで入学してきているのかというのは、やはり高校側も知る必要があるのかと思います。【司会】

指導助言

昨年まで教育委員会生涯学習課におり、実質 3 年ほど学校現場から離れておりました。そのために、本日の皆様方の会話も一歩引いた別の視点で見ておりました。助言という立場でお話をするのですが、皆様のご期待に添えないような話になるかもしれません。

那賀高校の発表原稿を事前に見せていただいて、非常に多様な生徒が入学しており、しかも、地域連携だけれども町外県外からの生徒も増えている、入学生の多様化が進んでいる、個に応じたキメの細やかな指導が必要とされているというところ、入学生の傾向としても発達障害のある生徒や小・中学校で不登校だった生徒が多数いるという点が気になったところです。

昨年まで生涯学習課で読書推進、障がい者の生涯学習の担当をしており、令和元年に国が読書バリアフリー法というものを制定してからは、視覚障害や発達障害、上肢障害等で活字による読書が困難な方々の読書環境を整備するという仕事もしておりました。久しぶりに名西高校で教頭として現場復帰して、生徒が遅刻をしてきたときの遅刻カードの対応をするという仕事があります。そこで、高校 1 年生が初めての中間考査に遅刻をしてきました。その生徒は、日頃から学校になじめず、人間関係を作ることが難しく、中学校時代からコミュニケーションがなかなか取りづらいと少し聞いていた生徒でした。保護者の方が車で送ってこられましが遅刻してしまい、遅刻カードを持って職員室へ来ました。しかし、理由が書けてなかったので、「理由は何ですか。腹痛ですか。それとも体調不良ですか。」と聞いたところ、生徒が悩んで泣き出してしまいました。私は生徒に対して、「なんてことを言ってしまったんだ。」と思いました。その生徒は、自分なりに理由を説明しようと思って、これまでの人間関係のことやざまざまなことを考えたはずなんです。生徒は長い時間言葉を探していました。私は、そのときに体調不良という言葉で片付けてしまい、非常に後悔しました。生徒は自分の心に正直になって、説明するための言葉を求めていました。そのときに私は国語教師として何ができるのだろうかと非常に考えさせられた経験があります。読書バリアフリーの仕事をしていたときに、あるオンラインシンポジウムに参加しました。パネリストの一人に熊谷晋一郎さんという、現在、東京大学の先端科学技術研究センターの准教授をされていらっしゃって、この方は生まれつき脳性まひの方で上肢障害、手が自由に動かせないという障がいをお持ちの方です。この方がお話になったことを少し紹介したいと思います。

この方は 1977 年生まれ、現在のダイバーシティーとは反対の均質化、なるべく規格通りの健常者に近づけるような教育を受けてきた。自分はやはり規格外の人間であって、周りはこのままであれば将来苦労するだろうと本人のためを思って、普通の身体に近づけさせようとして、毎日 5，6 時間リハビリを続ける生活をされていた。親心は非常にわかるのだけれど、当事者の自分はその 5，6 時間のリハビリに何の意味があるのだろうかと思いながら過ごしていたとおっしゃっていた。その方がおっしゃるには自分たちマイノリティにとって、日常生活の中で言葉としてやりとりされる、特に会話の中でやりとりされる言葉は健常者多数派の経験にカスタマイズされている言葉だと思っていた。 1 日 24 時間のうち、ほぼ 8 割以上は日常言語に包囲されている中で、自分はピンとこない言葉の数々に囲まれて生活をしていた。その中で自分の将来を閉ざしてしまうような言葉や価値観に包囲され、その中で自分に自信を持てなくなる生活だったとおっしゃっていました。そういったマイノリティにとって生き延びるために必要不可欠な言葉や考え方・アイデア・価値観というものが存在しているのだけれども､自分はなかなか出会うことができなかった。普段の会話や日常会話ではそういう言葉に出会うことができなかった。そういう経験を大なり小なりマイノリティの方はしているのではないだろうか。マジョリティに包囲されてどんどん言葉に押しつぶされそうになる経験をしていた。

この熊谷さんにとって読書がどういう意味を持つかというと、先程言っていた「なかな

か出会えない自分たちに必要な言葉に出会えるのが読書であった。」ということでした。脳性まひの方が書いた本を読むことができ、その中の言葉にこういった言葉に救われた。「泣いてもわびてでも、親の偏愛を蹴っ飛ばさなければいけない。」という言葉に出会った。つまり、親は、自分のことを愛してくれていて、そのために生きていくために必要なことをすべてしてあげようとしてくれていることはわかるけれども、このままだったら自分は死んでしまうのだ。という風な言葉に出会って、「よくぞ言ってくれた。」と「親の愛はわかっているのだけれども、このままであれば殺されてしまうのだ。」というような言葉に出会うことができて、変わることができたのだ。ということの話がありました。このことというのは、この方に障がいがあるということでの話でしたが、実はこれは普遍的なことを言っているのではないか、その発達障害のある生徒や小・中学校で不登校だった生徒は現在、皆さんの学校にもいらっしゃるのではないかと思いますが、言葉を発しない生徒たちというのは自分が必要としている言葉に出会えないのではないか、出会っていないのではないか、特に日常会話では出会えていないのではないか、今の子供たちというのは、「普通」ということを求めていて、どういう風に振る舞えば、どういう風なことを書けば良いのだろうかということを気にするということを私自身も感じています。その中でみんなが使うような言葉、言い回しと言うものが一方では求めていて、それで生活をやり過ごしていける、そういった正しい言葉も必要だけれども、一方で自分を救ってくれる言葉、代弁してくれる言葉が、欲しているのではないかと、この方の話を聞いてすごく感じるようになってしまった。そこで、那賀高校の発表を聞いていたときに多様な生徒たちに私たちは何ができるのだろうかと考えたときに、那賀高校の先生方の様々な生徒たちがいて、しかも中学校からその子たちが成長するのを見られて、どんなことを学んで、どんなところで人間関係に悩んでいて、そういうことを少し見つめてこれているということもございますので、是非どういう言葉を生徒たちが欲しているかというところも感じ取っていただいて、一緒に見つけていく、創り出していくというところにチャレンジしていただきたいと思いました。おそらく今実際にされているのではないかと思っています。なかなか授業に集中できなかったり、教科書の国語に興味を持ってくれなかったりと言う点において、非常に苦労をされていると思うのですが、そういった生徒に少人数だからこそ、様々なことに関わったり、話を聞いたりする機会がきっとたくさんあるのではないかと思います。それから句会を開く予定であるとか、オンライン交流会というのも考えておられるということで、中学生と高校生の作品を読み合って、感想を伝え合うというようなことも企画されているということですので、機会を作ることによって、中学生は高校生の日常会話であったり、必要なそういう言葉を知ることができる、高校生は中学生に生のその日常会話を教えたりすることもできるのではないかという可能性がとてもあるのではないかと思いました。これからも那賀高校の先生方、中学時代には目立たなかった生徒も入学したらめざましい活躍を見せるようになったということで、そういう成長を見られるということは嬉しいことだと思いますので、子供たちが必要とする言葉に目を向けていただいて、さまざまな言葉と出会う機会を作っていってみていただけると良いのではないかと思いました。